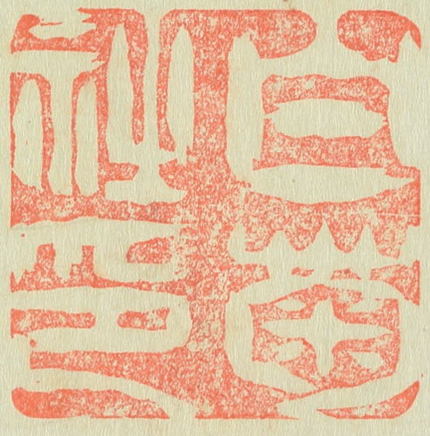
老圃

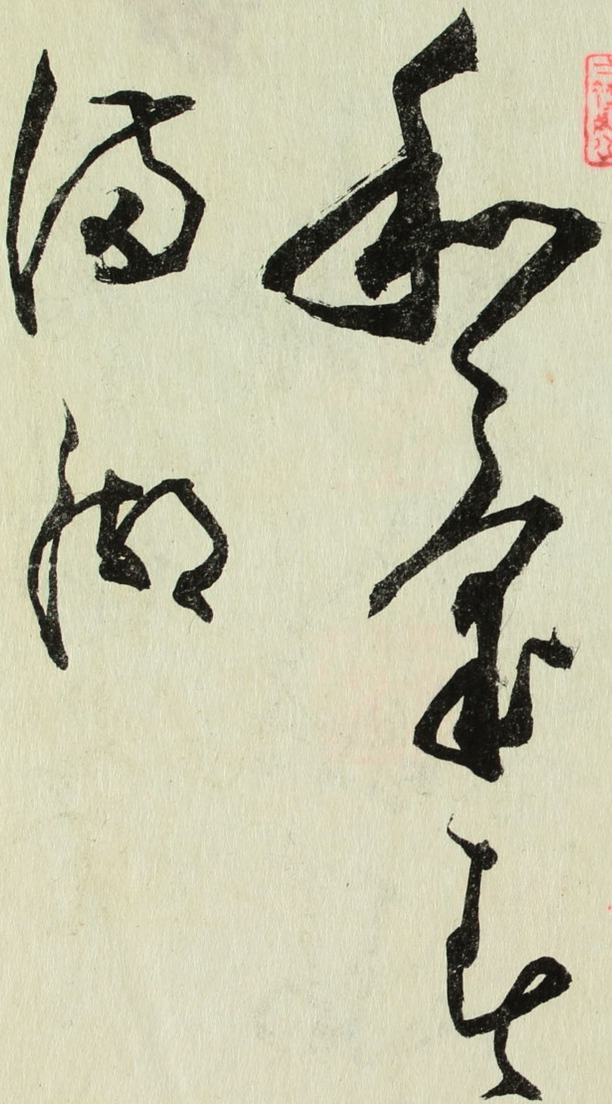


花園

已亥夏日
徳顕

靈巫
秀

從三位源千秋題

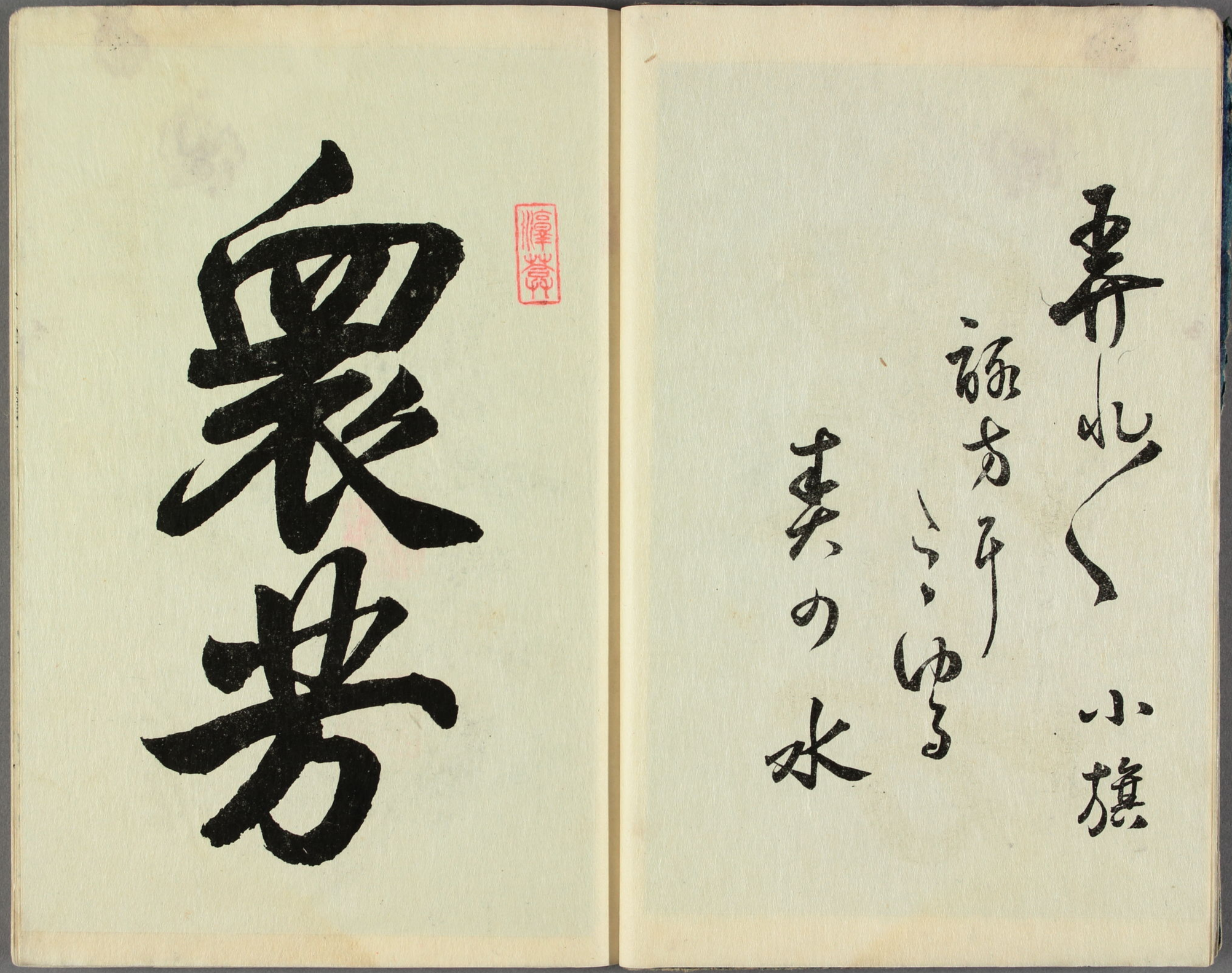


菊の志

梅名生

日本文庫

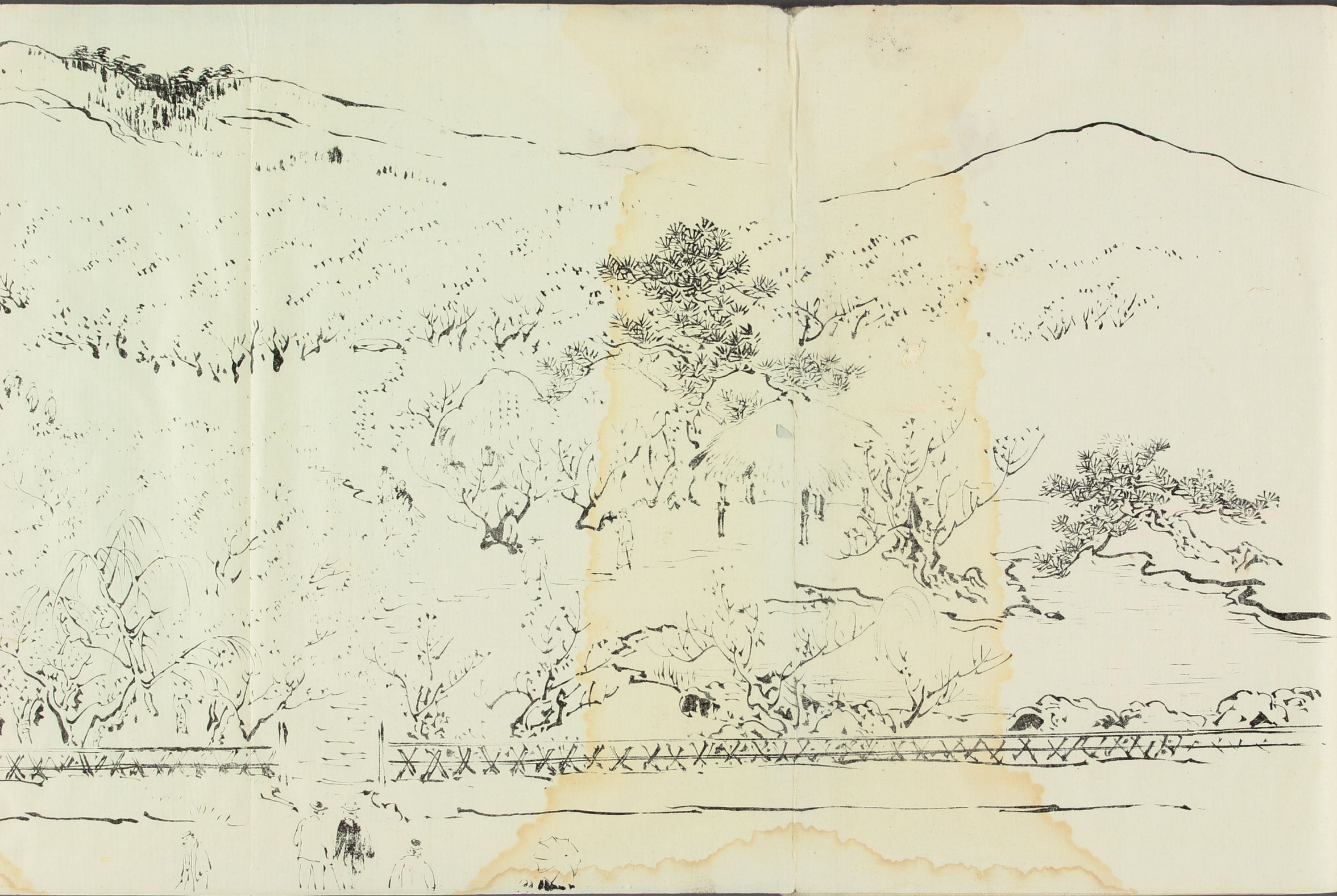
菊海の里ふ
老園はまれ
あるべし
海こそ見れ


澤蕚
奥
歩
弄水く
小旗
詠方
こゝゆる
末の水

淳化帖

波留安幾安
南宮王登之
富疏鬭番吉
可儺

上古有大椿の句をとりて
若き貴するものハ此勝地の
千家千傳をなをとりて千家
名を領せんことを願ハし
湖東洲注　雪人子



白菓の眼ふ立てる見る蕾ふ迄

昔を今に園の朝　月　梅寮

なるり鞭撻去の鷹ふ水呉れて　金芳

又も酒屋ふ歎うもも々　黎　秋庫

雲切乃有てる入梅九暮早く　松老

亦植ゆる日を皆ふとそ保く　寒湖

過塞の何ゝも不断よ釜乃滝　瓢亭
聲の出世れ澤ハされせぬ　梅雨
縁多村を二ヶ道ふ引く車水　知光
老樞すけかへる人間のしち　宗存
賑うふ釜を止觀の月澄て　凍湖
神屋野を渡る神代れ風　兼酔
露霜を駒弱の馬を引越し　茶朝
老荘よむとふ名ゆ　羽雪

突袖のうしろ姿ハよ次郎兵衛　月松
渡初する　橋れ　評　ゆ　其石
高津うゑ咲て涼華ハ老れ中　希心
日埃ゝ　はる風乃　河たゝ　の　一哉
狗脊を折りふ行ゝ　紙草履　ゝ山
死そ　ゆ　ゆ　跡乃　を　引　梅甫
凡ゝ　ゆ　外さぬ暮れ　明湖
飛ゑの　森れ　ふを　ゝ　涸湖

世の中はかなきを三手に廻り炭　楓山
姫ふくりてよいくらいしする　梅花
髪結ひ詞多きを品ふりて　珠莊
白を先年火餅茶の世　美水
窮屈ふ駕ふるのを昔ふり　松霞
波乃引目を須磨すれし　軍作
情壺の鶴を出てみよ月今宵　象弦
おとゝ此秋はまるふり断る　家碧

秋人の口ふ吐ひ零餘子めし　三九
うちに極つて鐘は銘　扇風
員公事の跡の仕来乃そこふ　佐保比
内のゝを交る三日の三寸　喜月
御柱を根ふしてすをもかをらん　聰秋
連衆七百よろつ代乃春　兼明

木母寺にうゑふかりぬ杜鵑　東京　其鳳
居眠の貫島ふかんせん更衣　永樣
明いそく蚤のあくしやゝ衾酒　鳳羽
澄ふうるや時乃雨あのゝ竹　夫
人の来ふせぬまやや来水鶯い　梅年
思ふ代や植えそ育魚松ち酒　尋香
斗酒あるや階ハ胡風刻む吉　紅葉
點滴ふ落北合点くゝれ小波

蚊乃口や朔顔からむ上都　松谷
惜ふのる蚊や結ちたゝ酒　千畝
白菜ハ大也美也春乃色　寒山
水ふ富む家たうわゝや合歓の色　康富
美雨や表札くちし家の門　無角
燭蛾汝か輩毋ふ多一　三巴
春風や幼なみ乃地花言　秋旻
水清く仲田乃里北東所ふ　酒竹

芍藥や詩集ひもとく窠の上　非佛
蛍火や水に上行く天の河　震江
重ねうちして又輕からぬ夏羽織　篤め
五月雨や有のままなる哥かるた　芙蓉
梅ふ媚て探題ぬやむ男うた　六嵐
荷ハ眠り童捉ル蝶ヲ小庭涼　孤月
更る夜を合々たるく水鳴い一路
惊一ッ飛て危し芍子の芒　僧三千

琴書なくハ慵かるへき春の雨　如雷
筆のたはし一落もちはり一東酒　鷺白
美面や美人髪絲さわっねつ　和静
落ちしまま水流よすむ棲の秋　卓堂
雨涼し一樽畫きて眠る須　天游
下乃句をつけもとなる扇涼　皆菱
我貧を情なの如しほとゝきす　何有
ふるやもやゆるまて夕あかり　樣久

小雪の庭梅花ちらく若き　永洲
初梅わきと少々中の郭　知十
夕闇に糸にさくる蛍哉　櫻知
そのまゝ小雪ちらす菜の葉　様一
此翁や薫るものは唯梅斗　雀志
寒月やんの立る水の上　梅甫
さゝ波や秋風わたる蓮の上　菟好
男の代乃遺賢と小川野梅哉　正義

梅の香の地まきたゝみと小雨降　採花女
出代や世を捨かねる寺男　志朝女
草の風行風送る徑の秋　春星
色過てものゝ哀なる桔梗哉　幹雄

餅の音に友ちきらる杜鵑　武義　角々
春乃風信濃路ゆきて聲ゆ　文め
雨乞やまゝ碗乃一雫　龍子

影うまぬうちに出むふ初汐　相模　宇山

わつ熱つ霧の中の一人乗　四覚寺　寒山

手植といおもをぬ赤し松の花　甲斐　斗月

静さや胡蝶翻る扇の湖　松月

芭蕉ちらす春の水ぐ鄭躅崎　一笑

紅葉や小雨の光る花のてり　喜水

来て見れば川は橋なし梅松竹　良

廻廊の朱もさめたる海鼠汐　駿河　蝸堂

更科を賞うら更ふ后の月　拙史

貼しき所をきれ事意抱　下総　旭齋

茶子提げて人に知らるる乗　横須賀　完和

もの思さの見ゆれ船まま帆のたゝみ　常陸　可昇

若かるる耳や松風清乃琴　上野　崎琴

手を打つて戴くわすれ扇乗　雪山

朝寒や性能清砂の懐手　鐵岸

投られて添伴居らぬ梅の影　素古

雲の峰漁村乃真晝靜也　下野　木葉

ぬれてある傘ふ雨降る五月雨　羽后　瓢仙

子規奇の中山寺まけ　口　吟風

紙草履月ハ朧なりふ　岩代　壮山

初鶏や其羽なくきい世のまり　桑月

黒猫も日ふ闌けて梅桃　磐城　桃壷

梅咲や蕚ふや月もよきゆゑ　陸奥　厂岱

海棠や人ハ櫻ふさわがしき　会館　宇供

洗濯の袖きる日や波ふ　小樽　素更　六

口閉ちて濁ふそ面囲ふ　佐渡　斧洲

有そうなき風ふあるまや若楓　越後　晴雲

蟲ふこうり好き初寅北ふ　旭扇

蕚や地ふ見四しを撫う月　抱月

墻ふさへ時ふ来よりふ木槿　木甫

正月や遊ひつかれ子ふいひき　加賀　瓢亭

南軒ふ鶯ハやかましく梅乃花　其草

必ずや雲なんぞ拭う月　招景

高空や古き光乃星一ッ　南立

遠山をけきあまさすはふの月　能登　正衛

物引ふ出す顔もせす　嫁こ天　百寄

蕾乃初雪や今ハ朝の起ん　越中　秋月

老の手ハ筆も迷ふ松の老　箕山

帷子をきて寒かるや朝わたし　志摩　十湖

春乃来や後れ先なら麦一ッ一哉

蓬茅やてふ猫つを引たる　可然

春雨まき水の油断を洗ふ　探水

下闇を名のる木ゝ枯れ飛雪山　峰め

名をきこえぬ古塚のあとや友本立　文女

竹けい来て野ふ陳かる北麦　木潤

遠東の病癒えて打川畑来　三河　石芝

老乃司たまく朝掘ふ色一夢

すみ出す客をうしろや縁の月　尾張　羽洲

傘に雨ふる間や　杜鵑　東友
彩ちらぬ蓮なく　撫子　杜發
羽をうきて人乃庵掃ふ人に　可翠
只居るも越るも日乃極楽　素陽
打ふや萩ふかれい萩乃露　荷庵
小さかしき中ふ蝉や夏の蝉　羊山
出なくや探りあてたる火打箱　耕雨（伊勢）
分入れハ野を深うるすゝ　果樵

水ふ置く影も一日やけ出る　近青
枯杉乃突ぬけて高ク新樹に　寄青
杉島に干潟よりちらせを吹　九峰（近江）
東雲や雲わき登る梅林　洗玉
袷着て新うなる仏来　石風（因幡）
明ほの寒みをちれうを蜜　鏡花（播磨）
駒とめてきくうの峰の杜鵑　三牡
山水や霞を引て落る音　阜左（伯耆）

裏ふのうらを表乃かさり哉　出雲　曲川

夏ぬあと猶大空やほとゝきす　芋村

古草乃上を流れ春の水　石見　一花

簞めを入れさやうの夏の海　周防　卒石

梅ふ眠のうれいなるゝ柳ふ　きつ　梅宿

二ツ来て笠とちも黙り名　豊後　晩節

梅みて梅乃宮さを忘れ名　半仏

そよ〳〵と梅ふ志ろし夏の風　豊后　乙人

露ふほす草木を月の名残哉　薩摩　梅青

澄みちも春ふ〳〵と梅乃宮　伊豫　蒼晩

雨蔭々牡丹花さもむる思あり　霜月

嶺下ふ小文ゆる屋ぬ慰この宮　讃岐　真海

ゝ立て名ふ来てるあき柳　哉　露垂

水ちゝや名ふ禁かくれる何ふ寒さも　阿波　抱青

若ふ入や別業の人も見それ勝　十竹

来る人ふ隙なく立ちぬ三ヶ日　大和　松友

初空よつゝいて涼乃みとり　長崎　竹外

夕富士や夏の姿はあらさ京　安藝　石山

まだ夏の暑を掃る扇の礼　天草　遠山

狙公よついてす這つるや蟹の子　馬溪　みね丸

庭さきや待たすとゝ来る鷸鷸　美濃　藍庭

つくゝと白し鶉何乃魚扇　十八楽　如竹

氏神や青梅ひとつ東の書　京都　楓城

初鳴へ寿かけわたせほゝきさ　逸外

いきりたつ馬糞かきやる寒ゝ　白悠

藪垣ふ何やら赤し〜〜烏うり　雨名

まき夏乃やうな日南や萩の花　稲處

きのふうら岡〜〜垣根やきりくち　大坂　南齢

初ちゝれ道の柳枝ふ赤めすわと　露城

恵のけも白ゝかゝる紅葉素　波鷗

朝顔ふ筆はまきれけり小春日　北叟

つ相ときゝのぬ里ゝ引板の音　支仙

香ゝ志はしくつろくぞ夜明来　朝鮮　山翠

上ル天竺ニ

適尋佛迹試追攀老木細
溪山又山登盡羊腸天竺路回
頭春色在人間

のほりくく春をうしろふ天竺寺　支那　子鑑

旨寒ミ雁と雁との別この邨　文治

草は燃え水まもる岩泉　信濃　對山

雨ぬれし山をかくしてけふの月　一枝

むら雨ぶいはほれて庭乃萩　鳳儀

退くやうを待ち合や雷ぬけ　黙通

眼の限りをつらぬ稲なびく　如竹

梅咲や用ふたつ度訳く窓　かみ女

ふなき人を訪ふ京も菓ぬ園　一聲

ケ既は雨いとふ屋きき　桜の事　青山

荻枯れくまもゆき舟をこぐ棹　雲洲

月いさゝ置いゝ柱乃あうぐひ　庭雨

朔月光影をふまへて水馬　仲遊

春旦や造花庭乃初あかめ　凌冬

三藏法師の屍を見てかなし

める類ひまゝ侍らねと旧里を去る

る五十里ちかく舟のあかきを向ひ

てちかすす物ハ思ふ事ある人し

むかし一髻をさゝけて交りたる

友乃里ハ友をすくなく我人と

なくさゝかねし秋ありけりし

夜寒とゝ人ハねちむく月乃光　曽良

渕もあらぬ家居の澄まかり
りくといはれるるゆを思ひいて
宇治すや伊勢のあと追ふ梅のを　素礫
月ひとつ頭陀をさめて須磨の石　僧 願王
いつまでも馬の屋をかけ春か来る　同 博道
　　氏自ハ天職ハたくりのをいまゝめ
　　玉へるよ申傳侍る
月見して草庵紅葉のあとをい　同 芸門

雨ふくむ葎ふ秋乃あつさ来　教念寺 十三 道阿

摩耶夫人蓮華の中ふ仏を産
落し給へを自ら行く事七歩ま
して天上天ふ唯我獨尊とう声
あけしも皆是五濁の穢垢をを
なさしめ三塗ち苦輪をとりの
けんとの企をるへし我等も衆生
のあらま数二仏の中間をうしを

かゝる佛生の時まそあひよるる地
獄へなりと極楽へなりと御差図
まうせふくすへし南無慈悲の
父よと彼柄杓をとりて頂くら
甘茶を灌きかけたりける
生るゝとめつたふ掬せぬ佛彩　正阿
茶碗水のおたくくやそうの月　若人
月を色ふ出るほとなり澄の裏　草龍

栗の本　震朝子　古

柳より笛ふ吹あて、秋乃風
望ミまとたるの御前や澄ふ蘇　忠誄子

望瀑の吟ハ旧藩公斯道ゑ
遊ひ玉へる頃の御詠とそ弐里
人を口すさみ申せを結縁の為
ふ大祝震朝子の什どもゝ出せし

水つきゝと忘れいせし神乃面守　柳平
白魚や水をきをれて水乃色　茶山

二日月素より知て居れいさゝそ　春壺
白魚は箒つゝくる曇の事　白外
雨うけこゝろひろうなし杜若　湘玉
ちるゝ花也梅乃枝はゆるたゝ　雪庵
心よけゝ木兎の梅顔や花の中　梅休
寒寺は鐘をかり鳴十夜寒　乙五
夷風乃蕣吹くゝ庵の流れ　笑痴
吹なつる原をくもりや桃乃花　雀甫

八月をみよと指す佛の事　曾柳
行もとり島は動うす柳寒　八代女
紫の戸や二十日は月ふ杜鵑　冈柳
墨ちは白ふ日和や飛胡蝶　守昕
杜宇わさと宵ふ出る夜寒　寡左
外ならぬ沼乃秋ゆやをうゝ　良久
ほつゝと虹乃色ちゝり花の上　有我
木の下を退けを風の　蕣桜　雲底

花守や浮世ふすめる人乃色　孫富

鶯溪

わるゝ世ゝ水の上ゝ化粧来ル　麦寛

むゝ〜れ孫るゆゝ新ぬくし柿茶碗　銀岱

咏史

よるゝ〜ゝや色より さきゝ暗き雨　其残

長〜ゝ菓の露　汲初ゝくれ　世外　上諏訪　十六

玉川乃水高くゝと高くれ色　一左

衣更着ゝふみ込梅の朱ゝれ　芒池

初時雨野ゝ人寄よくれゝ　芒軒

錦きた山ゝ山ゝしを破芭蕉　衣雪

船宿や漂客も居て夷講　紫帆

梅折て古人乃さえを惜む家　多眠

御祭やそもくゝより風薫る　芒夫

折てこの花破れさめたる櫻桑　用休
名殘る雁唯峰の松〳〵　芒居
寒月や濤かゝる松乃影　榮戸
琵琶乃音と窗ふ押合ふ冬　永久
出籠れ戸いあけてかりの夢の月　龍湖
村時雨夕冬ふ日ふ夷時雨桑　芒高
人寄りは馬も嘶く夜長桑　四賀　洞湖

神の灯と見まがふ森の若桑　松南
懐たつる人寄れ無ふ心の邪　直山
首逸まも嚴さ立着の櫻葉　喜遊
蟬の夢鐘樓乃黄昏左右桑　松泉
それかまア常れ貞のや　墓　自好
白菊や霧乃深さを打て知る　永昭　凍湖
月花ふ過きし遊やほゝきぢ　其石

山風もあらく常ならぬ梅の影　文義
寒さうらぬふりさそよけれ梅の花　閑柳
雪もみな流れて晴れて今日の雪　一風
老七日一日半ばかりおもしろく多祭　曽十
箸とるも色茶は向いて嘆嗟の宿　俳利
御降ばかり梅乃蕾をゆるめる　岩水
百代月鏡の裏乃恩いこの楼山　増穂
水上は神も在すの凍ル　湖

月あるもうつて見たし初手水　三笑
乞食の代なるもあり雪乃秋　一元
一筋は迷ふ道なきの雪　独秀　其心
四霞ふ氏水ありて新酒氏　花香
朔霧の晴て常なきの日和氏　天水
早乙女はも叩かるく朝戸の　松鶴
秋の山離れくふ暮れはなり　富山
初夏やもの影はすると朝の月　山水

更闌てみそらの町の灯案　一粟
さをすまし明る夜を行る冥ひ　一声
隣てハ藁うつ音や秋の雨　弥生
鍛冶う家の槌まで馴染む燕ひ　其声
数八の心とけ合る言葉案　永寿
君の代や丹波米乃飯　梅泉
梅てうらもん強や丹波梅　庭丹
小流いかくるやうれ義の鄰　銃丸

つくりの出来ー埴輪や木瓜の皆　玉水
土地からや涼とうそ京小樊ふい火　寿翠
揚勝を風れ裏みる雲雀案　義碧
膾まで香の添ふ菊のゆふべ　小仙

遠くとハ思へぬ香也菓の花　米治 梅甫
すへらく神ぶふ出よ初蛙　柳哉
おつかーき言葉北ぢや吉野山　笑聲

さんか殺す風邪ひくまいぞ機丹　唇風

誰の植えて桜を初乃浮しふり　晴山

爭ひも書因乃水ふ流れ色　其雲

俳保姫い野ま山まを生れけの　湖外

佐保姫乃鏡あるへき詠詩の湖　海人

接果てて守まも桜も願ふ事　松齋

眼のさえて見れて俳まに伝振い　松素

戻りといさ〜き旅也山笑ふ　静湖

蝶二ツ杜母乃ふ狂ふ邪　晴山

眠い眼を吹てのせふ出ふ春の風　四好

秋風や死を決したる墓の面　北山 石甫

八月を布団乾のちんとして　無声

或い落ちあるも結ひぬ草の露　松雪

着ん也を幾木綿と花　衣　子巣

花の香とまたた有ん也初桜　竹壽

月にさそれて桐の實ぬ鳴るかな　樂天
涼風を招く夢すると彩雲来　長樂
霞ム鐘俤ノ聞ゆるを面白し　為鶴
思葉〳〵をいつまて居るそ殘る宣　松喜
初とりや都みに出る心もち　北山
富士詣家〳〵や雀の小来　輪廻
朝顔や人の白髪乃美しき　和水
母持て来て遠く越す盆踊　北水

草を靡のせ〳〵野分の名残　士郎
山門は二百灸すると乞食来　柳湖
愛猫の巨燵を去らぬ寒哉　霞樵
露玉や〳〵とり〳〵火の上人此上　一秋
とゝの山を出向ふは似たり今日の月　秋月
老よりも一景色ありる若葉来　菊崖
黄菊白菊ふ〻定りぬ　榮雅
田乃水ひろ〻る夢や　飛竜　五荻

黄昏や雪より力乃見えて降る　湖東　雪朗

稗五升くゝ煮ゝ榾火ゝ　水音

書かけて雪見る笠の手紙哉　可才

梅咲や昨日ハ春をけふ春山

笠の陰春ゝ也ハ杉梅れ　蕉舟

ちる頃ゝ寄りて色増紅葉哉　嘗舌

初炭を画ゝかいてみる女の事　明春

稗蒔や ひとり日和を蓑ゝ哉　天栖

はくまをハ人ゝ笠れぬ梅木哉　青草

神棚ゝ供年を寄ゝの嫁ゝ君　一畝

濃砂ゝ寄ゝけしきや春の山　心覺

此ゝ比はしきハ河らし丹と梅　梅丹

古道や何の啼て呼子鳥　雪阿

浮草ハ一期を見たりおとゝ哉　雪堂

唯居れハ燈の来て訪ふ尾来　雪霞

年ハ坂暮日の惠ゝうけなかれ　菜泉

眼はたらや雲解る日乃東山　花函

奥北冒や代るくるて二百矣　豊平　池水

水仙の花やさらさら人恋し　眠岳

神前ゆ子蕾の捧けし肥後ぶ　かつら

鬼灯や重ねたる手も美しき　青志

錢金いつもたいものそ藥　喰　初鶴

蕾の眼いそ切らや埃のうち　菅流

樣咲く山ふ人捨つる鬼ハなし　樹殘

簑虫北麦ふ牛ひく少女行り　竹林

酒と茶と買ふて春待山家ぶ　柳花

悔あくや墨場定むる柿本鉢　玉月

朝寒や乃もの麦乃至膚寒　花玉

けふの日も富士ハ動のぬ涅槃寒　丶殘

蚤よまで及ふあさけや放生會　獨居

百千万人の浮世と面白し　大哉

春立てそるゝ梅乃白い素　泉野芳残
されからい浮世めくるゝ也おとし　霞廼家
住む山ふ笑まれて雪立つ日ゝ　花雄
寒梅や丹誠さめし花ゝ艶　嫩
老果さや庭ふ子供の主いちり　丈夫
日の本や昔なつらゝ初　幾涼久
宵闇や小田ふ蛍ゝ影ほふし　楊柳
吹風ゝさや寒つらゝ梅の蕊　窓外

毛氈ゝ敷ひろけゝ月乃宿　酒雪
日くらしゝ春の日松乃影ゝし　其扇
門松や昔一休禅師ゝ　秋月
梅ゝ事なるゝ上ふ涼乃花　玉堂
早乙女の達い嫁入ゝ　其柳
きりゝ〳〵ゝ一夜〳〵の嶋霞　残雪
橋守ゝ禁火ゝ清えて雲の声　青霞
茅屋や先ゝ春の日蛙　東雲

千早振神の法世より此初日られ　五彩
色と香のふさそしからす　雲章　花友
御忌日よめくり合せて海財司　梅嶺
白菓や闇引と芝の新しき　千声
公園よ人停むしや夜れ也　鶏月
自隣蕎や上下タかしの芝の酒　五岳
綾の家よ桃乃也者とよそれり　原芳殘

今年より菊海乃名よきく此法　千鶴
櫻狂ふ絶えぬ巷園乃人通　楚柳
朝宮乾く白ひや梅此門　鶯楊
傘さして片神ぬらす芝此司　房柳
人乃行く道さへ行けし櫻狂　柳月
色誘へゆめ此浮世や人の之　柳人
菓子代と名よきく海の櫻家　清齋
なつき日乃中よ短し花七日　映月

花の留守誰と頼まん人もなし　其外
され程の梅ふ癖なきの東　八梅
一夢いそれのあれぬ杜鵑　一雪
よき連と振しをみ　肥ふ丸　松代
石近く駒鳥なくや木曾乃里　龍泉
都まで恥ちぬふ家は梅の香　笑我
暮ゆく日を知らぬつらも百ふ鳥　月醉
鍬ついて出てゆみる門や笑ふ山　静花

木の葉まで窓たかく住居に一梅
公園乃出来あるる時花盛　蘇水
折まけしまく咲まり頃の梅　あや姫
白梅乃奥まけてある朱門東　若重
酔さめの水まを梅を掬まくや　龍洲
公園や菊ふ並ひて子の遊ふ　雲月
花ふ乃頭けて酒はの支度東　春乃
ふありて狂んゆく春乃海　士雪

菊園の中や白菊北所々　月松
五月雨や川上北に苗流れ来る　牛馬
年北坂皆悪き荷なる恩来　長楽
咲きし名の思ひ出されし草燈　壽松
男しまき一番あさぬ〳〵　花生
和の乃風ふ伸ひたる松の事　喜楽
待ぬ名ふ菊泉のもたより　雲月
桃咲や軒端梅さぬ町をつれ　若宜

葉梅や蝶乃なを居る　潦　柳水
さちらこれ北あや豆腐の早料理　泉淑
鴻一羽佇む軒やけさの霜　山人
人の手て出来ぬ木ふりや庭の梅　琴良
藥喰程の一字を命の形　里春
先庭の菊園かゝや鍬をしめ　佛有
二三人よん子持ちけり菓つくる　山水
新〳〵き百ふ深出す松この事　泉殘

若帖乃育つや老れ下かれ　本郷　昇山
柏手も響く清き庫後の れ　蜂窩
庭草いまだ二枝ふし蛇胡蝶　六石
鈴虫や奥きゆのしきたまする れ　庭山
牛ちんとねそ〳〵る上れ榻の家　壽瓢
菊月や老い小庵の朝掃除　未樂
松風のさそひもやらぬ時雨来　蓀山
木枯や角家をかすする鐘れ書　盤瑠

人もかう殊勝よけや菓の色　池龍
薫りくる風や風雅乃琴門　境　素柳
珍らしい所めをたし草の餅　和風
思ひ出すやうに時雨れ俗夜叉　露仙
格子まそさや伸て来よ葛花葉　落合　雲舟
掘をみれい草より俗し夏の月　雪洲

朝ぎうして蓄麥切れ甘き哉　古川

公園のあるじなる人　き梅　松　月梅

出てみれば星は中うら雪哉　桂男

君来ませ鳴澤乃花は露　千雀

太箸や蓬萊も久を祝ひつ　福壽

月は出て角より白し乃芝　玉齋

人も年寄れいかうや枯尾花　米山

涼しさや水底ふ見る富士は山　蘿城

草をふく風ふるや秋の色　乙士　富士見

松路やきのふふかたる和霞　和山

四方山はあつうも廣し百ふ雪　松山

年とへいハ千路あまりや菊の道　白藤

前に富士うしろに澤や蓮の色　鯰水

梅咲て家ぬしなる机の礼　花山

人に出き菓を昔は白ひの事　花春

奥ふかくある松嶋や初かすみ　金沢　可常

かやつきの窓根や巧や桃の花　二角

振袖い誰さてうらて嫁の君　升丹

元日や勝手を通る松の風　一高

新くるとやうたて居る夜の月　池水

けふよりえをふを強ふるもの雲　雨笠

日の光るほと色深し花は雲　一水

嫁ちさい先初花は便りれ　菊香

有合の箸よ菜碗よ梅乃和　梅露

寶を結ふ日をさそ待つ梅の花　明哉

白菓や汚れさ指もさしかぬる　宮川　菓露

心葛や日毎ふふえる梅所　久女

惜うれぬ命ふうらふ梅の邪　樂水

忠孝の二字は定めて常如　一工

大雪や眠ふりのハ水汁　大白

年號もつく〳〵大唐代乃初暦　雪竹
實さりたぬ草まよ吹らや秋風　景殘
世は蓬ふまきれぬ菓の白い茶　梅水
月色ふ杖さへ〳〵しを多　蓬　景山
色の陰眼ふ美しき瓢の れ　耕月
ちる夏ふ起はれてつる梅茶　如水
咲うぬ木もよく見らるやを仲　保樂
月ふ綱るゆ〳〵に啼ゆ〳〵の鹿　才見

総引や皆仕合乃人　斗　壽月
月は世の事さ貴うり色は詩　花月
孫ふまて不足いあ〳〵し生月魂　高山
滝面の清くありけり五月晴　硯涼
箸とりて涼さ曠乃山葵茶　今壽
月乃出字二度のはしきやこの山　冬雀
色は陰水よゆら〳〵流れ色　壽生
若草やまゝ嵐よ堪えぬふり　新山

松風を添へて汲たき清水哉　常山
羽根つかぬ程に長きや社の怪　瀧山
蛇蹄の都ふさぐそ巷乃園　芳葉
戦も川中鳴乃蛍の邪　玉光
洗ひしる硯を月の光るかな　磧
人まれ中や扇の黄ら風　榮山
松風を志ぐ絶えなりて此路　松白
訪れくる花も実の川　孤想

庭を身よゆつて戻る角力茶　一松
別れをば又逢ふ人や忘れ中　龍山
涼しさや枕元まで浪乃音　朝湖
侍保姫や山乃化粧の美しき　旭静
山憂や山をへたて友ひとを　旭朝
破垣よまきはくるすす初櫻　長川
今罪ふ笠や通しの芒の前　圓山
約束れ鬼竹ちらしたる茶　松山

草の露かゝりそめ　松山
門松を潜れいひろき浮世案　吉野
人の世やさかねふたゝふ稲の世　櫻枝
老足代や片足ぬけてたゝいて見る　大樂
人は寿と深さつけふや雪解る　幸山
神垣ハ子案鍾ふ多り苦れ芝　翠里
世ゝうれ世ふふ庭れ楊柳　喜久
白菓の芝ふ墨ハあかりけり　盟静

初夏や我日のもとふ雪ハおし　青山
雉子鳴くや山うら晴れて雲る里　涼湖
家内中世事て祝ふや三ヶ日　明海
國の名を問ふ人知る櫻柳　明志
漣やほのゝふ見る富士の山　巫女
皆世事ふけふ白菓乃數弘　玉山
ふ菊れ上も暫くは舟夜の船　鶯宮
ふいと来てつひ日くらや梅柳　一明

少程ふ由来ハ深し　巷乃奥　似水
一日の楊子　酔さ　ちこの邨　香石

眼よ深るめ　めさ　めや初震　中洲　松老
野の錦山ハ錦　や　錦　紬　一哉
梅きくして琴程ふ橋の足ゐる　唯一
春と梅店河ほかさはや米の飯　雪残
巷ハ中梅乃風の通りけ絮　耕叟

君のまハ何てるほそき春乃宵　右衛門
羽墨扇を各つふ納涼のれ　恵牛
生草ハ投けて行ほ茨の芝　一鼓
十六夜乃雪を押ひく小舟家　阜洲
梅咲て水ふほてり流き金　茶丸
世ハ中乃春あり弥生の人心　田都
巷の中出てれい暗き夜しう　梅居
盃て洗ふ齢や巷乃酒　而丘

隆さとを笑ひ照るとを笑ふ　依山

起勝ふあく戸の音や今年の春　湖南　珠莊

明日芭蕉忘とを掃除するしれ　椿窩

月を見る人を見て出てをく牧ひ　竹人

牡丹の郵　牡丹はやふ人の来る　松月

どちらへうら来る夕暮そ花の中　豊田　雷陀松

行先のはきぬ寄形り杜宇　眠水

一輪乃帰り花眼ふあまり色　逸梅

散る事ハをくてめてた年ハ　ひろし

見強しき菓や十日の月あかり　松眠

富士を始澄を左やをハ中　湊　洒落

営ハをくや昔乃小柴　垣　龍育

時をれや芝にゆるり桜桐　氷湖

過きし世を語りあふ日や初時雨　平野　希心

起さるる迄を疲れて春の雨　激石

けふよまこ石を枕のすみ菜　枕石

蝙蝠をそれ行く風呂のけむり　みか子

みよし野を秋の来れいそ出れ声　なを野

冬の山松のみとほりくる菜　柳夫

鶴のたきと共ふ柳乃伸ひよう　金柳

三十六

下諏訪

巻守れ峯つゝふ宵れ曇るれ　金谷

魚市乃手拭白き柳の影　柳川

空ふ浮船を根まして遠柳　可直

水渚を一奉駒鳥れ言ふ音ふ　一笑

欠るほと空あるもるやほときす　梧翠

猿曳の猿をいとる泊の宵　芳残

引合枕ハ見えれ春乃雨　休窓

馬引て娘乃来るや桃花　米水
更衣あるれ風乃命　この事　秋山
花樗實生德乃世あり々里　層氷
白菊ふ閨とふ頼ふあり々　蕉殘
裏表あき袖恒乃木芽茶　魯山
心茶の殊えて茶世を薫る　梅屋
ちゝきゝや園生なるゝ家あり　落玉
ひと時白ちゝれてきよし山の月　如佛

けふ買ふ蘇乃朶の中ふ出声　正倫
手枕ふ廬山の雨や花乃夢　有樂
廢院の菓枯れて雨まちゝ也　水外
白菊ふ白きふ月を押されを　鏡岱
不意ふきゝ庵ふ儲やほゝきゝ　長地 滴川
片里や牧遣なゝひを豆ちつき　東京 素水

行燈に灯先狐ふや蘐打　玉川菊明

見てうす居をいとを葉はれ長き向隅に　岳貼

正月をゆるく祝ふ二十日のか　子交

土手越のされを家さびし枯柳　康海

来廣く根をりれつよき竜蔓に　可貫

白菜小足をとゝむるゆふへの秋　茶鉢

元日い閑く扇乃要この邪　玉山

上下の明るく有るや芝の雪　一柳

人心新きをしめそ初櫻　山

氏暑あれとも秋を隣のな　潮水

神在す森のらあけて初稲　一川

遠山に雪を臘乃母様のれ　春静

飼ふ人い痩るへらあるを蚕のを　芝雀

轉ひ出るやうに石ある燈壮柔　柳抱

活てゐる花ハ胡蝶ハ狂ひこの邨　竹隣
日の白面ハ白や　桐の花　子雀
雲雲ハ蝶を抱よ　眠りけり　月砂
ふ風ハ藻乃を流す　野川柴　陽谷
よき人ハひと雲立いてゝ　若葉橋　ちから
地ハふるの立や　朝のうらやゝ雪　梅山
袖ふく風まゝ寒し　梅の花　明覗
かくれ家を包みし　梅ハ白ひゝ　雨草

出ハ音よりたり　止みて露ちゝれ　詠月
世の蕊いそをよせぬ　牡丹こゝ　一湖
乞食の袋ハ中ヒ　春日こゝ　棋雪
初やや松いきのふ乃　松形ゝ　幸殘
抱籠や秋風の蕊ハ　眠さあたる　梅月
見よ行ん菓ハ　ハ花の圖　驥齋
団子あゝや東明乃　鐘ハ　今　轉所
一粒ハ藥あゝ　し　夏ハ雨　谷水

閣の東は竹影あたれや雨　春路
鮓店や道中狭き華表茅　春雅
漢めぬ字ふ一些ためらる扇楽　泉陽
雨時やきけん直しそとふ胡蝶　喜楽
曳舟は底する音や露寒し　迂山
墨すれい軒端の梅は白ふ素　平一
折ふれは風ちうつき梅の家　梅雅
宮鮓さたい戻る花見ふ　頼山

老ぬれい花もたなのむそ路の臺　抜山
雨時やくつるほの稲は花　新声
立ふれい萩の白露ふほもき色　智泉
上ふ見ぬ人羨まし田植笠　秋水
紅葉みそ水みそ登る山路ふ　五宮
服ふ見ゆるゆ船寄ふほもきす　通智
簿きはふ重ねし色や冬牡丹　宝残
五月雨は時れよと嘴やふ根の恨　勝玉

若菜摘人と見えしより袴ゝけ　壽殘
江のよふ春きすみゝの鴨はなを　義風
日はてゝ見ぬ日いかけれとを初菜　松甫
際角ちし東のはふりやはなは山　民庭
きれ風のやうふやはらく野分　松山
姿先美を畫してや縣台　出泉
見ぬ時いきり飛ふらし三十三才　元真
評判ふ私あらし園はは菓　五粒

とり分けて白きこのゆのし菓はは　克明
無造作の接木伸縮つ軒端菜　花清
なきすゝゝ禁ふるりぬ子規　喜代美
むしれ袋所之めん花乃山　秋月
牧柱や閣乃中より水阿ら里　春花
町中やよい年をして芋売夷　竹葉
も夜堂頭の歩ミ覺束ふ　雪花
那ゝまふつふさんとせし菅菜　田門

寒けれと芝は勢ひや福壽草　蘆泉
晝降さ雨まそ蒼めそ冴今宵　宝齋
物い来て晴れよけり初　橘　梅友
かきこつる灯細しきりしに　月交
引そこの花数振なる小松来　銑丸
梯習ふ手ふいやさしき早苗ぶ　介石
町こそ也母ふるまそ茶摘哥　湖月
人い皆佛ある〳〵花乃宿　一丸

袂こそ木のせ牙酔るや一　撮　藤丸
年寄の唄念佛ま暮遅し　松壽
二三日い陽ま訪きす麥の秋　雪光
年毎ふ野させそめそや稲むれ　白元
盃乃上のかめやちる　櫻　雷電
さそこそふ金屏の繪や春の山　亀秋
雨水ゆれたり蓮の浮葉来　極山
鞦韆や風ふい菴ぬちりやすそ　明花

雨乞や勅のぬ雲もひらかれ　宝殘
初虹や簑ほ〳〵とする礫の家　可笑
き形れ家や琴は音止て渡る　可柳
美しき園とおり合を飛　蛍　明生
霄よ見さ雲ハ消えたり也　晴嵐
降り出す雨ふめたき音来　一亀
海山は春風うけて伊勢　春富
手入〳〵甲殻ハ降り合の園は菊　元花

點滴乃水は噂や蟬の声　錦風
風の尾ふ引わたれる胡蝶来　柳枝
白藁ハ弥ふめたき海のれ　中花
てたん〳〵と朝日はまてる也　雪舟
初燈や寒さの中ふ日は伸る　岱里
越えたる寒さ山見返るや泊　狩春調
捨藁ねてある也何まほとあまり前　祭舟
降らせしき雨は去るや夕納涼　両蒙

野仕ると見えぬ茶摘女殺茶　蘇山
夜もそろとあけさやうしはしの花　七羽
ゆつりあふ蟻の往来や苔老　梅里
念佛ふ實の入る後ハ彼岸菜　湖亭
代里ハ大家ふ巣ふ鳥ごのれ　素延
お多や山ふい雨ハ降ぬ　一知
折〳〵や蓮の露ちる雨あがり　何舟
芦の花咲や川ぶ迄ハ捨小舟　佳舟

梅咲やよしある家ハ硯箱　岱湖
白梅や昔ゆかしき黒羽織　山舟
殺そそそやりたき世ハ紙茶　隣雨
休場ハ心あそ行る暑ごの郵　春岳
青田ごの風吹くる風や町まつも　千丈
初毛や人の心もひらき　初義舟
心菊ち殊ふ尊し菓ハ中　弥源治
岩落る水音ちしを雪解茶　池水

菅笠苔や撫日はれ夕つゝ日　桃里
俤う飛ふ蛍や夜白の杜鵑　壽舟
ふきの葉ゑ小連られて採日ひ　涼風
屋過ふ来る夕飛の様猫柔　耕左
一夜俄雨ふゝれむ末はせ分ひ　一朝
尊さゝ空ゑ見えて稚家祭　松旭
湖見ゆる末陰ふ人の涼みゝ　山水
甲斐の嶺よかゝれふらしゑ峰　海壇

春めくや垣乃外まで蕗の薹　桃里
梅咲や茶よりきし水の湯所　亀明
屯閑さや床子ふるゑ丸影　源郎
金屏よ朝日まゝゆし梅の宮　巣山子
新しきめゝ寶や今年米　月海
口切や活けしる毛丸先ゆのし　花朝
公園を根ふしゑ茶の目ゑ家　一葉
寶雨丸寶芽よ多る柳う邦　蛇声

引鶴やさゝ静かなる池の面　旭菜
白風ふ洗ひ出されて蔦紅葉　文鼎
永き日や人の欠伸のごとき　此友
朝寒もそゝらぬ額や庭人　俵山
唯人も入るゝとの名残梅の園　譽
君の代や鍬もつ手ふと軍始　暦風
顔ふ皺ふ寄せまいぞ春　糖翁
落栗の湯を越しを流れ童　松臘

鼻紙の捨所ふ梅乃花　一笑
子い巻乃都ふ住て縄代守　洞名
巻ふ行く人も巻ひ折り道すがら　花香
山見れい朝飯すゝむ弥生の雨　頌風
春日いあれと二日乃二日　灸　松風
曙の空ふ紅そふ　はるゝ雲　宗存
門掃て聞のある舟の出汐楽　秋庫
雪五尺春ゝしもあき野末ふ　三九

碑のぬしゝ園は菴乃山　孫亭
菴園や懐ひけいくる行ゝ秋　楓山
引鶉はきけんも咲る洗日和　知老
身をつむ菴い絲や在野山　梅山
いひ出しゝ縁者の子也梅黄　寒湖
植込て白菓の香はあふれ色　明京

曾良翁

蚕飼する人ゝ古代の姿哉
青柳かくれて湖見ゆる里　殘
草枕撥撥ふるゝ世遠浪小　万玉
海より外乃好とゝはあるし　巨白
すゝくゝと嵐はあとの暮の月　子交
さゝふゝ川を越えるゝ芦刈　廉海

世の秋を通るあらいさんの所　梅居
才い西信れせめてをくまく　朝霞
吐られて次へ下りてむし暑く　梅山
三尺ハ無理ふつけ帯　梅年
古仁の便を今も爰さいち　可貫
お彩しやうは船毎日　正倫
漢むらふ新うある山家集　月声
人乃齢を孫乃香乃たちち　芳殘

白くと鈴ヶの森北曉乃月　用休
冷る井よい天象形　乙士
花檀ハ不足ふへき色を　世外
隨流垣乃水はさらし　一柘
四方蓋貢乃すきひよかけ　芒軒
衛士ふたとふいとう　雪花
世濱をんと休乃　風　泰山
喧嘩の行ものを　佛有

千奴笹田にて廊の菴にて　芝齋
意ち必竟家妃の代名か　泉陽
當ち好き旅よ三つ枕を暗いしち　洒落
小豆の粥ち腹持のよきし　禎富
ひとりして素扱百遍手を洗る　一才
帋よきと鐘の着る　小外
月ハ今落ちと汁のたんぬ園　雲舟
風のりやして寺乃ふき止　而丘

米買て薄の中へ船つけて　小仙
又さりすまふ官牌をしめる　花朔
昼の間ち人の居ぬ人ぬ　のし丸
すの〳〵ちさよ神のとも火　富玉
蓮霞引字奥ある杉林　雪人
雑子一声のあと鄰　也　明京

白菓ふ名を殘しゝる笹のれ　楚山
ちゝ見きゝも自然備るあり所　万玉
菊を守菊や菓を守られる　一才
菓ふ〜筆の手元いくれあるら　恭山
乘勝ち〜人そゆゝしき覽馬　軍作
花の山下れい里ゝ月夜の影　小外
春駒ふ沓ゝ旅をしや朝のさま　富玉
流つさす山彩青〜弥生盡　明湖

涼しさや植ゝ山ゝ筆乃家　雪花
嗤せしい何者そ老ゝ中　の〜丸
ちらくと夜明るとする梅柔　花朝
梅咲て四方乃詠の新あり　月声

子福者の果報〜ゝ里老梅　梅ゝしき
搗ちんと云ゝる漆乃木芽柔　楠枝
ひと本乃菓海山ゝ根分の事　五玉

梅のけしき老よまとてる旦素　清心
杖小手を重ねてゆ菓ぞうんる日ゆ　久山
人のゆを羨む日あり　夏　祭　春石
抱籠や隠士は軒閑ゆある　青田
撫小屋て心閑あり　老　碧　長松
菊は香の隠もやいする垣隣　一志
すてうもてあるめてたし　餘笛　望見
見ゆ居れい殖るやりある桜ゆ　一島

寒さうは顔しを在す佛素　金丸
菓咲て菊作うんあと思ふ日を　歌晶
積上げさ本の古ひや冬　籠　梅香
何事も凡すしてゆ壺閑ゆ　菓味
道りくや春吹風も才は藥　子菊
日よやけし南風の色は好ものき　菓山
際しゆい南古乃焚ぞあう　紀國
除来は鐘寺ふる才ま待ふゆ　花山

其中やひとつふたつの虫の聲　白鳥
葉隠や村中へ根乃張へかな　蘇清
試ふあけくる風は風加減　雨光
鶯の人の油断や桐一葉　勝山
月影を遊ふよ似うり水の上　蘇本
白菊や眼まと降りて地よ蒼　三章
蚊の声ふ己の顔ふう怒茶　竹山
ゆたもてふうれんとする梅ふ　運水

町ふたや大事の友乃辻ふ花　初口
名月ふ鶴を招かん園れ松　玄園
はふり菊ふ菊ふ顔ふる胡蝶ふ　次水
孫ふ手を引れて行や花の寺　清風
菊咲ぬ人の紀念乃鉢れ茶　大和
牡丹ふ人ふたとて相撲取　小松
落穂さへ三万石の實茶　丸榮
魂棚やんの菊れ美しな　幹居

草市やきみふい魚を賣りし家　流水
唵阿尾羅吽欠弁沙婆訶二月癸　菊二
菓窪也とある塔根もきくのを　菓所
月時て彩白菊も眼を立うを　新海
蕊を眼ふはるかと深うてはるの海　内殘
清水のやく積り名を作もの奥　清見
梅の香ふ誘ひ出されを老もの杖　かるめ
根分して菓窪とある日菓　子蟲

明日あらと人さそ申せ花の風　青年
咲花や何を不足て帰鷹　一貧
国年もはるく市代し稲の花　萬菓
旅人乃草庵見ゆれ梅の園　其才
よきてる北重合ふやを乃春　元亀
君の代乃宮とこ移られ初もの出　梅花
奏よいあけぬ戸を開き在所菓　一笑
賣道や菓の茶乃陰よ飛胡蝶　梅年

君の代は人よりまきて四方拝　壽松
黒塗り鏡に富士やけふの月　宮島
巳のすむ葉に嘯く蒙甲乙
梅咲くや早起ふたるる主人　素清丸
雑煮や神の灯の明残る　菊黄
員ふくろは美園の梅に　若雨
元禁静足寿しも乃法　朝霞

題や俄催乃　様は　糊　羽雪
つくり道皆蓋ひや　梅　松　美水
春を待ち上る老の巨燈　素　梅宝
実百や結縄ふるる　豆　俵　佐保比
古い〳〵る宝は宝子や　梅の花　松霞
琵琶の湖も氷解れ　帰雁　菓酔
西風ふ月日は過きてる　桜　乳　喜月
君の代の御魂あるべき　櫻　ゆ　扇風

其中より抜出て菊花白きはの至　禎宙
重陽すい遮莫　櫻この邨　梅雨
若と樂を忘る捨つゝき世也　金芳

冷麥也眠蚤のとまし畳孫籠　故　其實
細麥を壓面しゝ蚤きりくす　全　梅山
故人の名のゆうしけれ夏秋七百年
指みを毛園乃めいほくとゝ那しぬ

是ほとの志を蘇おれ筵の家　古升
京侍を人を見許せ花　雪　巨白
白紙を此地の幣のさいゝつま　殘
六十餘州唯一下賜ある奏賀家　梅寮

海内の
きゝ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

山館おもてゝ山茶花

樹蔭の水くまるゝ清らかし

[illegible]

雪の[illegible]

世せいそこ打ふとゝきしさ各家後を吟して

日乃筋あふく高士れ朝影　古升

懸鐵ふ春さうしろれ家建て　梅やしき

今とゝいふる籠乃若　鮎　清丸

人寿の遠さつゝゆく職　月　岳脇

振れ調度のよくて手軽き　苔雨

お齋つゝ断ふて自制しゝ　依山

達者自場をもりゝや　六十　春静

引伸にゆうふ育て　孫娘　花鳥
流行すてうれ髪よりのれたれ　花香
繁昌の滝草　千歳の揆こち　衣雪
さんな日和いの梅ふなまさう　一笑
夕月ふ後を咲せし蕊ふを　似水
渡とのすつる音れとえく　松風
講中れ麻ふ下ハ皺ならけ　柳抱
世並をよりて鏡の拂庭　柳夫

とめくりせとこうきり呼子鳥　一左
畠打ちまふ　頃乃ひてこの　久女
何事ちなをおこのしき壬生踊　羅漢
様嬢おしふはをる宗拙　久山
口過と筆れ命毛ちくふ　黄菊
又明すていんこ潛戸　一貧
赤見てを久しくなり翁丸　青田
雪起しまをもあれし山すみ　喜石

年木樵等の栖くちて苔深き　壽松
危い所て賢と流さぬ　長松
ゑもしさに羨ふとり酔す杯の　内狩
かちくらの祝ふ書ありかけ　膳　楠枝
待うえふ秋を追くゆみちて　滴川
放生會まて乙島居狩る　五玉
慣さけふ物ふ癖乃陰陽狩　金谷
小雨そほふる竹れ下みち　次水

有職ふ古い狩歌を引きし　望見
参て合せてるり酒さありつく　歌昌
長橋の出来よる日を芝供　龍湖
大阪小すみゆるき形き春　穢宮

追加

紅殘ふりの書をれ何た来　泉野　五明
あふくほとよく高一芝の雲　京都　聽秋

此篇也雪人子帰省中所撰
已亥櫻月[redacted]花幽校合焉

非賣品

岳拙史

編輯　白菊社

信濃諏訪郡[illegible]村東海

下諏訪　休内三吉板